

第二章 授業の構想

授業を構想するときを考えなければならない点が四点ある。目標（何を指すか）、教材（何をを用いるのか）、指導法（どのように展開するか）、評価（生徒のどんな力を見取るか）の四項目を念頭において、授業の構想について述べる。

一 目標設定の前に

(一) 生徒の実態把握

ア 生徒の国語力

目の前の生徒が、今までにどのような国語の力を養ってきたか、国語に関する興味・関心はどれぐらいあるのかを把握する必要がある。

国語力とは、主に語彙力など言語体系の知識習得にかかわる能力と「話す・聞く」「書く」「読む」活動に関わる言語運用能力のことである。この二つの力は相互に影響し合うもので、例えば、語彙が豊かになれば表現力や理解力が増すとと言える。また新しい学力の観点である「関心・意欲・態度」にも注目したい。

イ 生徒を取り巻く言語環境

生徒の置かれた言語環境では、ソーシャルメディアにより、限定的ではあるが、他者とのつながりが瞬時に可能となり、自分の好きな時に考えを発信することができる。またグループ内でしか通用し

ない絵文字、インターネットスラングなどの新しい表現が日々誕生している。

一方、携帯端末の普及とともに、対面して相手の表情や言葉から総合的に感情を読み取る体験的なコミュニケーションが減少し、更には核家族化により、異なる世代間のコミュニケーション体験も不足しがちである。

一方、読書環境においては、ウェブ版の新聞や辞書、電子書籍、ケータイ小説などの登場によって、書店や図書館まで足を運ばなくても、手軽に文章に触れることができるようになった。

ウ 生徒の精神的発達特性

授業中に積極的に発言しない生徒や、発言の声が小さい生徒に対して、「分からないから発言しない」「やる気がない」と一方的な決めつけをしないように注意する。生徒は自己意識の高まりとともに、周囲との関係性を重視する時期にいることから、クラスメイトの視線を気にして右のような行動をとることもある。

(二) 求められる国語の力

変化の激しい「知識基盤社会」に対応するため、生涯にわたって学び続ける態度と、生活全体を通じた言語能力の育成が必要である。論理的に意見を述べる力、言語表現を通して相互の立場を理解し合う力、目的や場面に応じてふさわしい表現をする力、さまざまな資料に基づき先を見通す力が必要となる。

さらに、言葉を通して他人を理解する心、物事に感動する心などの感性を育み、言葉の美しさについての感覚を磨き、多様な言語文

化に関心を寄せる態度を育てることが求められる。

二 授業計画の作成

(一) 単元案の作成

各学校の年間学習指導計画に沿った単元ごとの指導計画を作成する。長期計画の中で明確な見通しを立てることが大切である。

(二) 目標達成のための教材選定と教材研究

ア 教材選定

身に付けさせたい言語能力にふさわしい教材を選ぶ。教科書所収の作品は学習指導要領の目標に沿って既に教材化されているので、それを利用する。しかし生徒の実情によっては、目標達成のために新たな教材を選択しなければならないことがある。日頃から指導者が生徒の興味を引くような資料を集めておくことよい。

なお、優れた教材は生徒に気付きを与える力をもっている。我々指導者は生徒の興味関心の対象を見極め、学習意欲を向上させるような教材を発掘するべく、常に感性を研ぎ澄ますべきである。次に掲げるものは、指導者の工夫次第で教材となりうるものである。

- ・ 図表、音声、画像
- ・ 地域教材（「あいち文学散歩」「あいちの文学」など）
- ・ 古典芸能（能、歌舞伎など）、演劇
- ・ 新聞、雑誌の記事
- ・ 漫画、アニメ

イ 教材研究

教材研究では「教材理解」と「教材の扱い方を考えること」が同時並行で進む。

教材を理解するには、作品それぞれのもつ力に気付くだけでなく、多面的な捉え方をするのが欠かせない。生徒の実態に合わせて教材を取り扱うことが必要になるからだ。

また教材の扱い方には、単元目標に応じた言語活動や授業形態の選択、発問と板書計画の作成、生徒の実態に合わせた補助的ワークシートの作成なども含まれる。

教材研究は、教材理解とその取り扱いを考えることの間を行きつ戻りつしながら深めていくものである。

(三) 授業の計画立案

単元案に基づき、目標作成、言語活動・教材の選択、評価の一連の流れを見据えて一時間ごとの計画を立てる。特に単元における「次」のつながりを意識し、一時間の授業の目標が独立しないようにする。また一時間ごとの評価の結果を次の授業目標に還元することが大切であるから、単元目標に沿いながら、一時間ごとの授業目標は柔軟に変更してもよい。

教材を媒介として、指導者と生徒または生徒同士が交流し、生徒が意欲的に言葉を用いて授業に参加するような計画を立てることが望ましい。

三 授業展開の工夫と活性化

(一) 形態

一時間の授業の中に、目的に応じて、一斉学習、グループ学習、個人学習、発表(プレゼンテーション・ポスターセッション等)などのさまざまな形態を取り入れていくとよい。

以下にグループ学習の例を挙げる。

- ・ブレインストーミング(集団で自由にアイデアを出し合い、頭脳の回転を刺激し合う創造的な集団思考法)
- ・ロールプレイング(役割演技によって、ある場面における問題点やその解決法を考える学習法)
- ・ディベート(ある主題について、対立する二つのグループに分かれて行う討論会)
- ・パネルディスカッション(ある主題について、異なる立場における複数の代表者による公開討論会)
- ・ジグソー学習(協同的学習法)

(二) 発問の工夫

発問・応答(返答)は思考することの第一歩である。この発問、応答(返答)によって授業が展開していくと言っても過言ではない。単に「分かる」授業で終わるのではなく、「考えさせる」授業を展開することが大切である。授業終了後、その内容について、生徒が更に学ぶ意欲をもつことを目標に、単なる質問だけでなく、考えさせる発問を投げかけることが重要である。生徒の言語能力に合わせたオープンエンド(結論を出さない)の発問がよい。

ア 「質問」と「発問」(文部科学省ウエブページより)

「質問」は、知識や書かれている内容についての問いで、知っていれば、もしくはテキストから見つけられれば誰でも答えられるものを言う。二者択一式もしくは多肢選択式で答えられる問いである。一方、「発問」は生徒の思考・認識に疑問を投げかけ、より深く確かな考えへと導くものである。生徒自身の体験を踏まえた感想を引き出したり、生徒に新たな気付きをもたらしたりする問いのことを言う。

イ 「声を出すこと」への誘い

発言や返答の誤りを他の生徒に知られたくないため、発言を控えがちになる青年期において、声を発することへの抵抗感がなくなるよう工夫したい。ペア音読、隣席の生徒同士の話し合い、アイスブレイクワーク(緊張感をほぐすエクササイズ)などは、発声・発言への抵抗感をなくすのに役立つ活動である。また、教授者が応答の誤りを頭ごなしに否定しないことも肝要である。

更に、授業の流れが滞る場合は簡単な質問をし、緊張感が薄れた時は考えさせる発問を出すなど、生徒の様子をよく観察し、多種多様な質問・発問を取り混ぜていく工夫が求められる。以下に質問・発問のヒントを挙げる。

- ・授業の冒頭などに、生徒全員が簡単に答えられる質問をする。クラス全員に達成感が感じられ、学習意欲が起ころ。
- ・意見が割れて討論になる発問を出す。指導者の発問について、生徒が各自で考えてノートに答えを記し、ペアで発表し合う。相手の意見を参考にして自らの答えを振り返り、修正点を検討する。

この一連の活動が、論理的に思考を組み立てる学習となる。

・本文中から根拠を探さなければならぬ発問をする。正確な読みが要求されるので、是非取り入れたい問いである。

・自分の経験と結びつけて考えさせる発問をする。生徒自身の経験と照らし合わせて考えたことをノートにまとめ、皆の前で発表する活動を通じて、生徒は多様なものの見方に気付くことができる。

・生徒が「分からない」と応答（返答）したときは、「何が分からないか」という質問を重ねる。生徒と教授者とのやりとりそのものがコミュニケーション活動となる。

ウ 応答（返答）の扱い方についての留意点

生徒の応答（返答）を指導者の都合で言い換えないようにする。生徒は意見を聞いてもらえないという気持ちを抱き、積極的な発言を控えるようになってしまうので注意したい。生徒の応答（返答）を他の生徒と分かち合い、互いに考えを深めることができるよう配慮する。

（三）板書等の工夫

ア 学習目標の明示

生徒は板書によって授業の目標を再確認し、授業展開を視覚的に捉えることができる。板書は生徒の考察、批評、共感の表れであり、生徒集団に共有された授業内容を示したものとなる。特に学習目標が授業終了まで見える板書しておくべきである。一時間の中で黒板を消す動作があつたとしても、目標は残しておくようにする。

イ 板書を用いた学習活動

生徒が自分の考えを板書する活動があるとよい。一つの問いに対して複数の生徒が自分の考えを書く機会があれば、思考の比較ができる。ホワイトボードシートを使うと、生徒は書き込みをしやすく、指導者はそれを動かして整理することができる。また、シートを基に話し合い、考察を深めるといふ発展的な授業を行うことも可能になる。板書をする準備も含めて、生徒は考察、構成、記述、振り返り、推敲、交流という学習活動を行うことになる。

ウ ICT機器の利用

要点を素早く確認させる目的であるならば、時間短縮に効果的なICT機器を利用するとよい。また、生徒自身にプレゼンテーションをさせることにも積極的に取り組みたい。資料を調査・収集し、考察した内容をまとめる力、聞き手を意識した表現力が必要とされるので、プレゼンテーションは、生徒にとって主体的な学習活動となるだろう。

（四）ノート指導

ノートは生徒の理解の程度を表すものである。特に予習の記録には、生徒自身の事前理解が明示される。また、学習内容の記録でもあるので、授業を理解できたかどうかの目安にもなる。更に、家庭学習の折に授業の内容を振り返ることもできる。ノートをつくることの大切さに気付かせ、自らの考えを深め、整理する力を身に付けさせたい。

ア ノートの構造化

「ノートを見れば、これから授業で何を学ばいいか、また何を学んだかが自分で分かる」というノートづくりを指導する。指導者がノートをつくり方を教えることもあろうが、理解の仕方は人それぞれであるので、生徒個々のスタイルを認めることも大切である。また工夫されたノートをクラスで紹介することは、生徒同士の学び合い、学習意欲の向上に役立つであろう。

イ 留意点

生徒に以下のような助言をするとよい。

- ・ 指導者の質問を赤ペンで書きとめるなど、板書されないことも記録に残す。
- ・ ペンの色を変えて自分の考えを書き込むなどの工夫をする。
- ・ 付箋を利用して疑問点をノートの中に蓄積しておく（質問するときに役立つ）。
- ・ 予習に使ったノートを、発表用構想メモとして利用する。また、自分の思考の過程が残るので、振り返りの資料として利用する。

ウ ワークシートの活用

ノートでなく、ワークシートをファイリングしていく記録の仕方もある。完成したワークシートをファイリングするので、自分の学習の経過を自覚できるという利点がある。

(五) 家庭学習の指導

国際化、情報化による変化の激しい社会では、生涯を通じて学び

続け、学びを自らの生活に生かす態度を養うことが求められる。

本を読むことは、思考を深め、教養を身に付けるのに役立つばかりでなく、知識や情報を収集し、活用する力を養う基盤ともなる。さまざまなジャンルの書物を、継続的に読んでいくことが重要だと気付かせたい。

また、今後の学習指導要領が、学習意欲の向上や学習習慣の確立を重視している点も考慮して、生徒の学習環境が多様化する中で、家庭学習が定着するよう指導の工夫をする必要がある。

ア 読書を勧める指導

- ・ 授業の中で、指導者の読書経験を基に、教材に関連する書籍の紹介をする。
- ・ ブックトークなど、生徒が読書の経験を発表し、生徒集団で共有する活動を行う。
- ・ 司書教諭等と連携し、図書室の利用促進をはかる。
- ・ 新聞、雑誌、ネットの情報を批判的に読むこと（クリティカルリーディング）の必要性を教える。
- ・ 読書体験を、読書感想文にまとめさせる。感想を文章化する中で、生徒は読みを深めることができ、コンクールに参加することによって、読書へのモチベーションも上がる。
- ・ 読書日記（書名、作者名、読んだ期間、一言感想文などを記す）を勧める。

イ 課題についての指導

短期間に与える課題（日常の課題等）については、以下の点に留

意する。

- ・ 予習・復習は、目的を明確にした上で指示を出す。予習の目的は、「何が分からないか、できないか」を自分自身で知ることであり、復習の目的は、授業を経て、予習段階で分からなかったところが分かったか、新たに課題意識をもてたかを確認することである。
- ・ 家庭での学習の仕方を教える。家庭学習のプロセスが分かるようなワークシートを作成し、事前に配布してもよい。
- ・ 長期間に与える課題（長期休業中の課題等）については、以下の点に留意する。
 - ・ 明確な目的のある、時間を要する課題（図書館などを利用して調査が必要な課題など）を提示する。
 - ・ 生徒の学習のプロセスと成果が分かりやすいものにする（決められたテーマについてのレポートなど）。

コラム③ 【予習の仕方（例・生徒の実態に応じて工夫する）】

- 一 現代文の予習
 - ・ 本文を二回読み、疑問に思ったこと、印象に残った箇所をノートに書き留める。教科書の本文に線を引くのもよい。
 - ・ 分からない語句の意味調べをしておく。辞書を引く行為が単純作業ではなく、文脈に沿った意味を見いだせるような考える行為であることが望ましい。
- 二 古典の予習
 - ・ 原文を三回音読する（読み方に自信の無い箇所をチェックする）。
 - ・ 頻繁に教科書を見ることなく、原文を三〜四行おきにノートに書き写す。
 - ・ 原文の隣に現代語訳（直訳）をしてみる。自分でどこが理解できているか否かの確認をする。分からない語は古語辞書を使って調べる習慣を付ける。複数の語義の中から、文脈に沿った意味を選ぶようにする。

（六）節度のある活性化

授業においてまず必要なことは、目の前の生徒集団の特性を知り、それに応じたルールを早期につくることである。そのルールについては、必ず指導者と生徒との間で共通認識をもつようにする。また一つの正解を追究する授業ではなく、多様性を認め合う授業

を展開するよう心がけたい。誰もが自分の考えを安心して自由に表現でき、互いにそれを受け止めることができる協同的な学びの場をつくるのがよい。

- ・少数の意見を受け入れる雰囲気をつくる。
- ・自分の考え、発言に責任をもたせる。発言時に理由を添えて述べよう指導する。
- ・一人が発言しているときは他の人は話をしない（グループ学習においても同じ）。また発言はクラス（グループ）全員に聞こえるように指導する。
- ・生徒の様子を見て、集中力が切れてきたと感じたら、活動の種類を変更する（聞く↓話す等）。
- ・自らの判断で選択できる課題（好きな詩や俳句を選んで鑑賞文を書くなど）を与える。

四 評価

授業の目標に照らして、達成されたことと課題として残ったことを分析し、達成されなかったことは、次の授業の目標に組み込むなどのフォローをしなければならない。

(一) 評価に用いる資料

- 生徒の活動の表れを評価に関わる資料とする。
- 生徒の発言、生徒の作成した板書
- ノート、ワークシート
- 小テスト、定期考査

・生徒による自己評価表、相互評価表

(二) 評価の方法

生徒の学習活動の成果を評価の対象とする。評価方法は次の三段階で設定する。

ア 観察、点検

「行動の観察」・「記述の点検」
目標達成のための学習活動があるかないかを観察し、点検する。ワークシート、ノート、課題の提出などから、その学習活動があるかないかを点検する。

イ 確認

「行動の確認」・「記述の確認」
生徒の学習活動が目標を達成しているかを確認する。ワークシート、ノート、提出物、テストの内容などから学習活動の目標の達成状況を確認する。

ウ 分析

「行動の分析」・「記述の分析」
生徒の学習活動の目標達成の度合いを分析する。ワークシート、ノート、提出物、テストの記述内容などから、学習目標の達成の度合いを分析する。

(三) 評価の時期

ア 毎時間における評価

授業改善のための評価は毎時行う。それぞれの学習活動に応じて授業ごとに評価し、次時の指導に役立てる。

イ 単元における評価

指導後の生徒の状況を記録するために、単元などある程度の長い区切りで評価する。

(四) フィードバック

生徒の学習意欲の向上、学習方法の改善、指導者の授業改善などのために、生徒に評価を還元しなければならない。

(五) 学習の振るわない生徒への対応

学習の振るわない原因を、生徒のノート、家庭学習、発言内容などから詳しく分析し、次時に指導する必要があるが、場合によっては個人指導をしなければならない。

また指導者の側にも反省が求められる。教材は適切か、授業の展開が整理されているか、難しいと予測される内容は、ゆっくりと時間をかけて繰り返し説明されているかなど、毎回の授業における振り返りを必ず行う。もし指導者に不備不足があれば、後の授業で必ず不足点を補うようにする。

◆参考資料◆

- 町田守弘『国語科 授業構想の展開』三省堂 二〇〇三年
川本信幹『魅力ある国語の授業を創る』東京書籍 二〇一〇年
益地憲一編著『中学校 高等学校 国語科指導法』建帛社 二〇一三年

日本国語教育学会監修『国語科単元学習の創造』東洋館出版社

二〇一三年

国立教育政策研究所『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』教育出版 二〇一二年

コラム④【「関心・意欲・態度」とは】

評価の観点のうち、「関心・意欲・態度」は、学習したことについて更に深く学ぼうとする関心や意欲が、単元を通してどのように培われたかを評価するもので、いわゆる授業態度や単元に入る際の関心・意欲を評価対象とするものではない。この観点は発展的な学力を評価する観点であるので、評価の方法としては、前述のパフォーマンス評価などが適当である。

また、この観点についての評価は、特に、指導者側の授業改善に役立つ。生徒から「もっと知りたい」「更に学びたい」という意欲を引き出すような授業が、よい授業であることは言うまでもないだろう。指導者は、観点別評価を、自らの指導改善に役立てたいものである。

コラム⑤【教師の仕事の成果】

一流の教師の仕事の成果とはどういうものだろうか。生徒に好かれている、生徒の成績が上がる、保護者の信頼が厚いなど、さまざまなイメージが頭に浮かぶ。

ここで大村はま（一九〇六～二〇〇五）の「一流の教師について」（『教えるということ』より一部省略して引用）を紹介する。

仏様がある時、道端に立っていると、一人の男が重い荷物を積んだ車を引いて通りかかり、ぬかるみにはまってしまった。何度も抜け出そうと男は苦しむが、なかなか抜けない。仏様はしばらく様子を見ていたが、指でちよつと車に触れた。その瞬間車はぬかるみから抜け出すことができ、男は車をからからと引いていくことができた。男は仏様の指の力で抜け出せたことは知らない。自分が努力して抜けたのだという自信と喜びで車を引いていったのだ。

右の話を先輩教師から聞いた大村はまは、「もしほんとうにすばらしい教師であったなら、子どもは私のこと（存在）など思わないかもしれないと思います。あの仏様の指のような存在でありたいと思います。先生の指がふれたとも気づかず、自分の能力と思い、自分のみがきあげた実力であると思ひ、自信に満ちて次の時代を背負っていつてくれたら、私はほんとうの教師の仕事の成果はそこにあると思うのです。そして、仏様の指のような見事な技術を持ちたいと思います。」と思ったそうです。

「先生のおかげでここまでできた」と言われると、教師としては喜びを感じるのが当然であろう。しかしそれは二流、三流に過ぎない。一流の教師というのは、生徒自身の力で何事かを成し遂げたと感じさせることができる人である。

◆参考資料◆ 大村はま著『教えるということ』 共文社 一九七三年